

し一方、昭和45.5.7に行われた新都市計画法による市街化区域の線引き及び県の第3次総合計画では、中井町、大井町等は丘陵全体に「農村的性格」の役割を与えていることから、これからのような変化をしていくのであろうか。

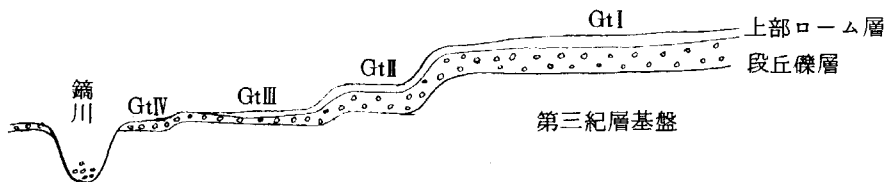
鐮川中下流域の地理学的考察

森 純 子

本論文は、群馬県鐮川中下流域をフィールドとして、地域の地形、土壌及びこれらに対応関係について考察し、さらにそれらの自然環境を基盤として成立する土地利用の変遷及び現況について論述することを目的とした。

1. 本地域の段丘面は、GtI, GtII, GtIII, GtIVの四段に分類される。いずれも第三紀層基盤の上に、GtI・GtIIでは10~15m, GtIII・GtIVでは1~3mの段丘礫層を不整合に載せている。

2. ロームを被覆する面は、従来GtI・GtIIのみと考えられてきたが、筆者はGtIIIにもロームを載せる部分があることを確認した。従ってGtIVはpost-loam面に、GtIIIは立川面に對比されるのが妥当と考えられ、その結果、GtIIは武蔵野面に、GtIは下末吉面に相当すると思われる。



鐮川河岸段丘の模式的横断面図

3. 先に東木氏(1929)は、鐮川支流の反Y字現象から、土地の西方へ向かう傾斜運動を推定したが、鐮川及び河岸段丘の縦断面形からは、東方への傾斜運動が推定された。従って鐮川流域の全体的な地盤運動の方向は、段丘の非対称的配置から推定される北方への傾斜運動とあわせ考えると、北ないし北東であると推定される。

4. 本地域には、火山灰を母材とする火山灰土壌、段丘物質を母材とする沖積土壌、崩積物質を母材とする崩積土壌の3つの母材型の土壌が発達する。またこれらは別に地下水の浅い地域には、グライ化作用の結果グライ性土壌が発達する。

5 これら土壌型と地形面の対応関係をみると、G t I・G t IIには火山灰土壌が、G t IIIには沖積土壌・グライ性土壌・火山灰土壌が、G t IVには沖積土壌とグライ性土壌が主として発達する。なお微地形と土壌型の対応は、本地域全体を通じて、一般化することはできないことがわかった。

6 本地域における土地利用の特色は、昔より畑作の比重が非常に高いこと、しかも明治以来、田畑比率にほとんど変化のないことの2点があげられる。これは主として、地形と表層地質に影響されて、地下水が深く、利水が困難なことによると考えられる。

7 本地域では、安政開港以前は、麦・雑穀を中心とした自給的穀作農業が営まれていたが、開港を契機として、養蚕業中心へと移っていった。この時の桑園化は、上流の山間部より始まって、明始末には中流域に及び、昭和5年の最盛時には下流域の一部を除いて全流域に及んだ。その後、桑園は1929年の世界恐慌、それに続く第二次大戦により減少したが、桑園率は現在をおよそ40.2%を示す。

8 現在の農業は、高等園芸・畜産の導入など、新しい動きもみられるが、依然自給目的の米麦野菜作と換金目的の養蚕業の2つの柱からなるといえる。

9 地形面と土地利用の関係をみると、G t I・G t II・G t IIIの微高地は桑園又は畑となり、G t IVの旧河床と、北流する支川からの引水が容易な下流域のG t IV及び高田川・丹生川の谷底平野面は水田となっている。

発展過程からみた川崎市の都市地理的考察

矢野道子

現在の川崎市の都市的性格を考察するために、その発展過程からみることにした。論文の構成は次の通りである。

序文

- | | |
|----------|------------|
| 第1章 市域概観 | 1 自然環境 |
| | 2 社会環境 |
| 第2章 発展過程 | 1 工業化以前の川崎 |
| | 2 工業化の過程 |
| | 3 住宅地化の過程 |

第3章 川崎市の都市的性格

川崎市における今後の問題